

昭和十七年十二月〜同十八年一月二日大別山作戰參加、昭和十八年二月〜三月湖北殲滅作戰、四月江南地区戡定作戰、四月十六日〜六月二十五日江南殲滅作戰に参加（本作戦に於いて第三大隊は歩兵第二三六連隊―高知―と共に小柴支隊となり軍司令官より感状を授与さる）。

昭和十八年十月十八日〜同十九年一月十日常德作戰參加（第六十八師団配屬戸田部隊―歩兵第二三四連隊（第一大隊欠）、独立山砲兵第二連隊第二大隊、工兵第十二中隊）。

昭和十九年四月二十九日〜湘桂作戰第一期參加（本作戦に於ける戦闘で、第十一中隊、町田少尉以下二名、第十一軍司令官より感状を授与さる）。

八月九日〜湘桂作戰第二期參加（桂林等攻略に於いて第一大隊は軍司令官より感状を授与さる）。

昭和十九年十二月十四日〜同二十年二月二十七日、南部粵漢作戰參加（本作戦に於いて、鉄道及術工物占領の挺身部隊とし、甲挺身隊―第一大隊、丙挺身隊―第二大隊、及個人とし三浦衛生伍長は夫々軍司令官よ

り感状を授与さる）。

昭和二十年二月二十八日〜五月二十七日、広東省樂昌県付近に在りて鉄道術工物の確保並に同地付近の警備に従事、五月二十八日、広東南方地区の確保及び三南作戰に参加、八月十六日江西省南昌に於いて軍旗奉焼。

兵力、内地除隊三、〇五六名、現地除隊一〇一名、死亡六四一名、入院四九二名、転属一、七四五名、不明八九名、残留二九名。昭和二十一年五月、分離帰還す。

将校への過程

島根県 井上光雄

見習士官勤務四カ月

今次大戦に幹部候補生出身の予備役将校が残した実績は、将校としての戦績全般の過半を埋めてなお余りあるものと信ずる。

私達は陸軍の將校短期養成の目的のため輩出された見習士官が、いろいろな苦勞を積み重ね、一人の將校として育つその過程の一例を残したいと思う。

私が予備士官学校を卒業したのは、昭和十六年七月、大東亜戰爭に突入する五カ月前であつた。その頃の大陸の戦局は比較的順調に推移していた。学校では對ソ戦に重点が置かれた教育訓練が行われた。

卒業と同時に中支の揚子江北岸の蘇北地区の警備を担当する独混旅団へ十七名の見習士官が配属された。

折から台風圏内の怒濤の黄海の、高波をかい潜つての航海に、中支派遣の諸部隊要員三〇〇名に近い一団の見習士官一行は、揚子江にたどりつき、やっと生氣を取り戻したのであつた。

南京に上陸して総軍司令官に、さらに陸路上海に着き第十三軍司令官に着任の申告を終わる。旅団より我々の受領に派遣された曹長に導かれ、鎮江で揚子江を渡河する。

揚子江と大運河

揚子江は支那大陸の中央を縦貫する大河である。鎮

江付近で河巾が六キロ位と推定される。対岸の民家や樹木の上部のみが僅かに望見出来る程度の河巾である。どちらを向いても山も丘もない平野の中を、江水は滔々として大きな渦を盛り上がりながら流れて行く。日本内地の洪水時のような濁つた水の色である。この偉大な風景に中国大陆のパワーの一端を覗くようである。

中華会社の蒸気船がポンポンと音を響かせて河を渡つて対岸の六坪へと向かう。この船はそのまま六坪から大運河に入り、古代の都、揚州へと航行を続ける。

大運河は杭州から蘇州に至り揚子江を遡航し、六坪から再び大運河に入り、遠く北京に至る史上の大動脈である。この付近では現在でも、交通、物資の移動、運搬に唯一の大役を果たして、行き交う大小ジャンクの間を私達の船は縫うように航行を続け、一行は揚州に上陸し、さらにトラックで江蘇省泰県の旅団司令部に赴任する。

捕虜娘子軍部隊への慰問訪問

旅団長は蘇北作戦中にして、司令部を追つてさらに

南下を続け、南通で旅団長南部襄吉少将に着任の申告を終わる。少将は奥州南部藩の藩主の近親者で、その品格凜然たる壮容に接し、この人の指揮下に入る光栄を深く感じた。

翌日、閣下から、この作戦で捕虜とした新四軍の娘子軍部隊への慰安訪問という珍しい命令が下された。

この娘子軍は三、四〇名で共産軍の演劇班員でインテリ連中とのこと。この蘇北作戦で我が軍の捕虜となったもので、我々見習士官一行との交流を通じて、和平の理解を深めるのが目的の企画であった。一同は若い娘に混ってピンポン、庭球、バスケット、あるいは歌唱と打ち興じ、戦塵を外に楽しい一日を過ごしたのであった。

南船北馬

やがて作戦終了と共に各自の配属する中隊が決まった。江蘇省内で揚州を境界として南船地帯は大小のクレークが日本内地の道路網と同様に分布し、どこへでも舟艇で人も物も移動することが出来た。

一方、北馬地帯は揚州城外二、三キロの地点から始

まり、地形が二、三〇メートル高くなり、台地丘陵が起伏して北支へと連なる。

この丘陵の始まる地点に有名な日本の仏教伝導僧鑑真和尚の故寺があった。また一キロほど南の地に楊貴妃で有名な五亭橋の富んだ円庭や建物が残されていた。

北馬地帯へ入ると一変してクレークは一切見当らなくなり、二、三〇頭の驛馬の背に荷物を振り分けに乗せ、馭者も騎乗するか徒歩でこれを追って物資の運搬に従う。人の移動も徒歩で、時には一輪車に人と荷を右と左に乗せて運搬するのも見受けられる。面白いと思つたのはこの一輪車に小さな帆をかけて風を利用している男も見かける。大陸的な風物として眺める。

私の任地は独歩五五大隊・第二中隊、揚州北方四〇キロの天長県城の守備隊である。

この警備隊は旅団の警備区域の中で、ただ一つの北馬地域に属する地区の警備隊であった。トラックは砂利一つもない軍用道路を砂塵を巻き上げ走ること半日、天長県城に到着。天長県城は大きな城壁に囲まれ

た直径二キロ位の街であり、中隊は街の中の西北方の建物を利用して本部と兵舎にしていた。

中隊はこの県城のほかに南方八キロに金家集、北方四キロに護城橋、揚州との間に大儀集、仁和集と四カ所に分遣隊を派遣し、所謂「点と線」を確保する寡少守備隊形の典型的な配備である。

夜間巡察

私の赴任後、中隊長は付近の討伐と見習士官教育を兼ね小出撃を繰り返し、行軍中の警戒、休憩、宿泊中の警戒等、対中共軍戦闘上の注意事項につき大要の教育が行われた。我々が学校で教わったこと、また南支で体験した事情と全く異なったこの蘇北地区、特に中共軍に関する対策に暗中模索の思いがする。この警備隊は昼夜を問わず城門の南北東西の四個所に日本兵の衛兵所を置き、その中間位に警察隊（支那兵）を立哨させて警備に充てている。週番將校はこの歩哨線の夜間巡察が重要な日課であった。

城壁を一巡すると六キロ以上の距離があり、深夜の巡回は大変である。通常は当番兵を同行するのである

が、疲れて眠っているのを起こすのはかわいそうなので、単身で巡察に出かけることが多かった。

城門衛兵は夜間は城門を閉じ、樓上に立哨し異状の有無の報告を受けるが、問題は中間立哨の警察兵である。彼等の立哨位置に近づく、「巡察」と予め声を掛けて近づく。応答のない場合眠っているのである。銃を抱いて胸壁にもたれ、中には座って寝ている者もいる。寝呆けて発砲される場合を考慮し先ず銃口を握る。次で蹴上げる。驚いて銃を離し一目散に逃走する者もいる。この中間歩哨は役に立たない存在であった。

この城壁の東北の立哨位置は以前の警備隊の時、敵が六メートルもある長い梯子を遠くより搬送し、この付近から城壁によじ登り、折から巡回中の巡察將校を射殺し、中隊を襲撃し大混乱を引き起こした地点であった。ここを通過する度に緊張する所であった。

ある日、日中の市内巡察の際、南門城外の街で掴み合いの夫婦喧嘩を見かける。主人の方に私の軍刀を、妻の方に当番兵の銃を貸し、「遠慮なく充分にやれ」と告げる。夫婦はこの突飛な仲裁に双方ニヤリと笑い、

夫婦喧嘩はこれで一巻の終わり。和やかな巡察風景である。

金家集・分遣隊長

九月中旬、金家集の分遣隊長として赴任する。この分遣隊は私の赴任する半年程前に、敵襲撃を受け全滅の悲運を受けた警備隊であった。旅団の警備地域の最西端の前線に位置する僻村にあった。

警備隊は部落（一〇〇戸）の南端にある丘の寺院を守備陣地・宿舎に改装したもので、前の警備隊の全滅の原因が守備陣地としての改装工夫を怠ったことに起因していたので、その後徹底した防備の処置が施され、私もさらに陣地補強と、この陣地設備に據る防衛戦闘訓練を徹底して行った。

陣地の概要は寺の建物とこれに連続する庭の部分は厚さ四〇センチ位な大きな煉瓦で積み上げられていて、小銃弾の貫徹は充分防ぎ得る厚さがあり、このやや四角形を作る建物と壁に敵が取り付かないように四つの角にトーチカを設け、この四囲の壁の死角を側射し得るように射線が作られている。敵は前回の攻撃で、

壁の死角に取り付いて屋上に手榴弾を結束して屋根に穴を開け、この穴に次から次と手榴弾を投げ込んで、屋内に籠る守備隊を殲滅したのであった。

さらに壁から四、五メートルは見透し可能な掃射地帯を作り、その外側に水壕を設け、水中に有刺鉄線を沈め、さらにその外側に低い片屋根型の鉄条網を張り囲らす。

陣地内の中央部に望楼を設け、擲弾筒座を設け、回転式の夜間標定射撃の設備を施す。装備は重機一、軽二、迫撃砲一、擲弾筒四の人員に比し重装備である。兵力は日本兵一五名、支那側警察隊四〇名をこの寺院内の建物の別棟に同居させ、日本兵の射手には各々弾薬手として警察隊の兵を訓練し使用する。

昼間付近の住民の退去を求め、実弾射撃を重ね距離、方向の標定を確かめ、かつ敵に対する示威効果を狙った訓練でもあった。夜間夜襲に際し、中隊主力の援助はほとんど期待出来ない分遣隊が、生き残るための必要から生ずる知恵であり、指揮を取る者の当然の責務であった。

勤務は夜間衛兵五、六名、他は全員軍装のままで舎内で仮眠、歩哨は二名宛を動哨とした。午前は訓練で主として銃剣術、午後は就寝、隊内の宴会等は午前十時頃から始め正午には終わらせて夜間の警備の完全を期した。

私の日課として毎夕刻、紐付き手榴弾を四囲の鉄條網に仕掛けて廻る。明朝またこれを撤収して歩く。毎日のことなので雨露に湿って爆発しないのが大半であったが、時々夜間本物の手榴弾を爆発させ、その個所に他で射殺した犬の死骸を放置して、「夜間鉄條網付近に近寄らないように」と掲示板を掲げ、対敵宣伝効果を期待する。

赴任の日、分隊長から「この分遣隊長は前任者は少尉であった。見習士官の貴方が着任されたことで敵側に軽視される虞がある。任官まではその服を脱いで下さい」との注意と上着の便衣が渡される。この便衣の上衣の姿で、巡視にこられた中隊長とお会いし、中隊長に笑われたこともあった。この便衣で任官までの三カ月を通したのである。

小出撃命令

九月中旬、この分遣隊に着任した直後、旅団命令として「各警備隊は向こう一カ月の間、付近の敵を求めて極力出撃を敢行せよ」との電報を受ける。敵は各警備隊の間隙を縫い、共産地区の拡張を狙い、宣撫徴税を反覆しつつあり、その敵の企図撃破するための命令であった。さりとてこの寡少配備の中から出撃のため抽出可能な兵力は日本兵七、八名、警察隊二〇名、装備は軽機一、擲弾筒二、彈薬手は警察隊をもって充てる。これが抽出力で戦力は二分の一小隊程度か。出撃可能の距離は一〇キロ以内で、正午頃には帰營出来る距離とし、服装は、脱出反転の際を考え全員便衣、地下足袋と定める。

朝、出発は四、五時、払暁を期し目的地を急襲、即時反転帰路に着く方針を分隊長連中と決定する。

長興集への出撃

出撃第一日の便子墟への出撃は敵との遭遇もなく、秋のピクニックのような無難な出撃に終わる。出撃第二日目は西へ六キロ程離れた福勝塘とし、早朝目的地

を襲撃するも敵影を見ず。ここでさらに四キロ程進んで長興集まで足を伸ばすよう一同に伝える。瞬時、一抹の不安が兵の間で流れたが、反対する兵もないので前進を続ける。

この長興集は一年程前この大隊主力がこの付近の金山で苦戦し、中隊長一名戦死、その遺骸もその時には収容出来なかつた戦歴を残した場所であつた。

長興集の右の台地に到達した私は、そこに長い敵の散兵壕の一端を発見、報告のため一歩二歩と歩側に移る。その時私の横にいた当番兵が「隊長敵です」と告げる。顔を上げて前方を見ると二、三〇〇名の敵が我々の前方を塞ぐように、横切つて移動中である。と同時に路上斥候に先行させた久川兵長が駆け戻つて「街は敵で一杯です。同行の警察隊員が二、三名、敵に捉えられました。奪回して連れて帰らなければなりません」との急報。寡兵に敵の大部隊、着任早々の見習士官の私は処置、判断に迷う。

「この散兵壕に拠つて戦うこととする」と全員を配置につける。敵はその間にこの長い丘陵を包囲するよ

う近づいて来る。

この時である、壕内にいた分隊長の樋口上等兵が壕の上に立ち上がり「この稜線に沿つて引き揚げる。絶対に発砲するな。また走つてはならぬ」と私に代わつて命令を下す。

兵一同上等兵の指示に従つてのっそりと壕の上に立ち上がる。中には銃口を地面に下げて保持している者もいる。そして隊は静かに稜線に沿つて後退を始める。敵はこの丘陵の西側の浅い谷間を我々を挟むよう包囲隊形を続けながら静かに追尾している。私と久川兵長は小隊の最後尾を、この丘陵がなるべく長く続くよう折りながら歩む。

三十分位退いた地点で丘陵が盡きた頃、敵から完全に離脱することが出来た。

この不可思議な戦いは当時共産軍が戦力を保持する上で不必要な消耗を極力避け、共産地域の拡充に重点を置いた現象であつたと思う。いづれにしても不馴れな見習士官の頭上に振り下ろされた大鉄槌であり、樋口上等兵の敵状に応じた果敢な処置で救われたのであ

った。

草廟山の歩哨

私達の陣地から遠く望見出来る草廟山（四キロ位）と呼ぶ小高い山があり、その頂上付近に立哨する敵影を見ることが出来た。敵愾心をいやが上にもかき立てる眺めである。

この敵を捕捉する案を計画した。敵との中間地区に主力を隠蔽し、敵の部隊を射程内に誘導し、網の中へ追い込む作戦である。私と擲弾筒手と二人で歩哨線に近づく。この歩哨の報告で敵の一隊が現われて来た。私達は逐次後退してこの敵の誘導を続ける。

が、この時ふと敵の別の一隊が私の退路の左側背の部隊に侵入しているのを発見、これは大変だ退路を塞がれると擲弾筒を一発、この部落に射ち込んだこの爆発音に驚いた後方に伏せて置いた部下の者達が、この部落の敵に対して射撃を開始した。射距離が五〇〇メートル以上あったので戦果の上がない結果に終わった。

この時私の眼鏡に映った敵の個々の散兵の動作に感

心した。我が方の射弾の下で、射撃の後小銃を腹に抱いてコロコロと反転後退し、また射撃に移る。決して立ち上がったたり、中腰の姿勢をしない見事な戦闘動作である。敵兵は弾帯を肩から襷にかけて携帯しているので反転動作が容易であったであろうが、立派なものと感じる。

この味方の伏勢の中に警備隊の重機が搬送され加わっていた。久川兵長を留守の長として残置しておいたが、彼が重機出身であり、重機は最少でも四、五名搬送要員を必要とするので、炊事の水汲爺の苦力まで手伝わせて重機まで警備隊から持出し、加わっていたには驚いた。

大爺営出撃

秋の終わりの頃、敵は兵力を急増し包囲圏を近付け、望楼から視察すると、敵部隊が警備隊の近辺の部落まで侵入し、昼間でも彼等は隊伍を組んで左右に移動するのが目撃出来た。敵の収穫期をねらつての徴税工作である。この時期が終わると敵はまた旧の後方に包囲圏を戻すのである。

この時、「収穫された米穀が八キロ程離れた大爺宮に集積されている」との密偵情報が入る。私はこの敵を排除し、住民の徴収された米穀を奪回することを企画する。

この朝、私達の出発後二―三時間を経過してから部落民に告げ、大爺宮へと後続させる。未明にこの寺を眼鏡で詳細に確認したが敵影らしいものは全然発見出来ず、同行した警察隊に警備と後続した徴収隊の掩護を一任して、私は三キロ程離れた論興集の部落宣撫に向かう。

論興集に到着、住民を集め宣撫を始めようとした時、不意に盛んな銃声を聞く。方向は先刻の大爺宮の方向だ。隊を銃声の方向に引き返す途中、敗走中の警察隊に遭遇する。事情は警察隊が警戒もせず街内で徴収行動中、寺院内に潜んでいた敵が急襲したらしい。朝の寺院に突入もせず「敵なし」と判断を下した私の失敗である。

論興集の西方にある五〇メートル位の丘で警察隊を収容しながら防戦態形を敷く。敵はかなりの兵力の部

隊で、丘の麓の部落を中心に逐次右に左に包囲に移りつつある。その間に警察隊は携行銃弾を既に射ち尽くし、「小銃弾呉れ」と群がって来る。

戦闘の長引くことを予想し弾薬の消費は禁物である。携行予備弾の箱を私の尻の下に敷いて少しずつ支給することとする。この時小銃手の銃を借りて、右に迂回中の敵に対しお見舞した一弾が見事に敵を射殺し一同の喚声を浴びる。重機出身の私は前後通じて、自分で戦闘中射撃し命中させたことはこれが一回だけの経験となった。

このままで援軍の期待のないこの高地で戦うのは不利と判断したので、小隊を半数に分け、半数をこの高地より警備隊に通じる側の四―五〇〇メートルの台地に後退させ、この援護下に半数を渡す。この高地に二―三名が残り最後にこの高地を撤退することとする。

最後まで残って高地を確保していた私達三人が早駆けで後退中、突如引き上げ途上の小さな小屋の陰に一つの間に潜入していたのか二〇名程の敵が不意に現われ、ドーと追撃して来た。と警察隊の孫軍曹が踏み留

まって敵兵に手榴弾を一発。さらに岡野上等兵も留まり立射で小銃射撃。この二人の援護で私は力走三人ともに無事小隊の位置まで後退することが出来た。

孫軍曹は事変当初の正規軍で、徐州戦等で日本軍と戦った経歴を持つ歴戦の勇士であった。路傍の貯水池に顔を突っ込んで水をカブ飲みしてやっと呼吸を整え帰路につく。

その夜、疲れ果て就寝中、衛兵に叩き起こされて見れば、枕下のフトン火事である。翌朝小隊を率いて近くへ宣撫を装い出動の留守中、打ち合わせて置いた分隊長が帰営までにフトンの補修を終わっていた。大失敗であった。

情報蒐集

第一線警備隊長宛に若干の情報蒐集費が支給され、前面一帯の情報蒐集が義務づけられていた。私は主としてこの街に住む羽毛の行商人の買取に使用した。この羽毛の行商人は遠く敵地帯を行商して廻るので、この商人達をマークして敵情の蒐集につとめた。この商人達の選定・下話は警察隊長が予めして呉れる。私は

便衣に拳銃を秘せませ街の魔窟のような阿片屋に入る。単身である。

入り口付近でマッチの軸一本位な粘状棒状の阿片を五円位で購入し奥へ通る。奥の狭い汚い個室の中の寝台の上で件の男が横臥しながら私を待っている。話の内容は先刻警察隊長を通じているので私の下手な支那語で結構用が達する。

先刻購入した阿片をマッチの頭程の大きさに切って煙草の煙管状の吸煙具の先端に詰めてアルコールランプを近付けてやる。ボゴボゴと腹の底まで煙を飲み下す、そこでお茶を一杯、もう一服、さらにもう一服、さらにもう一服。三服位で彼は陶酔境に入る。私は残りの阿片を紙に包んで彼のポケットに収めてやって四圍に充分警戒を払いながらこの魔窟を密かに抜け出る。これが日本流でいえば料亭取引に匹敵するものらしい。

彼等は出発後二―三カ月を要して遠く奥地へ行商を続け、敵の背後の敵情を持ち帰り報告するのであるが、この種の密偵は日中双方共通のスパイである場合が多

いとか。阿片吸飲者は、阿片のために命をかけて働くのである。

擲弾筒

その朝も未明の部落に突入するも敵はなし。小高い丘の上で、携帯した乾麵包で朝食中であつた。神野上等兵の率いる路上斥候も前方一〇〇メートルの廟の付近で同じく朝食休憩中であつた。この時敵の小部隊がこの路上斥候の眼前に不意に現われる。驚いたのは双方で、共に一瞬混乱状態に入る。どちらが発砲したのかパンパンと急射撃が起こる。慌てたのは私も同じである。

何時、どうしてか擲弾筒が私の手中にある。うろ覚えで一発ドンと発射した弾は、敵の遙か遠く後方でドカンと凄いい爆音で炸裂する。不馴れな私がかも慌てて最大分画の（六八〇メートル）まま発射したのである。敵の方でも驚いた。彼等の遙か後方で大きな爆発音に、この方向からも攻撃部隊出現したと勘違いしたのか一目散に遁走に移る。我々も急追したが、捕捉することは出来なかつた。

入隊以来、重機関銃出身の私は擲弾筒射撃等には全く縁がなく、今日は「結果良し」に終わるも一同から散々冷やかされながら、あたり一面に芽の出たばかりの麦畑の畝の道を帰路につく。

炭焼き作業

この分遣隊の余技に炭焼きがあつた。この旅団の大半が江蘇省の平坦な南船地帯で、北馬地帯に駐屯するのはこの中隊だけで、冬期の司令部本部の暖房用の木炭の補給はこの分遣隊の不文律の慣行となつていた。

分遣隊の鉄条網の外側の斜面に小さな窯が築かれ、軍隊に入る前に炭焼きの経験のある者達によつて窯の補修、材料の積み込み、火力の調整監視、窯出し、荷作り等の作業が繰り返された。時には、窯の密閉不充分が原因か、炭の取出しにかかつて窯を開けてみると、全部灰になり、炭は一つもないこともあつた。私は炭焼きについての経験がないので手助けも助言も出来ず、専ら材料集めの方を担当する。

この原料収集が大変である。北馬地帯とて関東平野のように雑木林が沢山あるわけがなく、ほとんど民家

の周囲の樹木を伐採するのである。目的部落に到着すると、部落の前方に歩哨を立て、時には軽機の銃座を設け、警戒態勢を取る。次いで選木に移ると住民から苦情が集まる。

「あの木は先祖伝来の樹で、あれで父母の棺を作るために大切に保存してある木が残して欲しい」茹卵等を籠に盛り上げて陳情が集まる。中国では父母の生前、木材で丸木舟のように穿って堅固な寝棺を作り、内側は黒、外側赤漆で仕上げ、父母に安心して冥途に旅立つてもらうのが唯一の孝養であるとのことである。諸般の事情を斟酌して苦情を処理するのが一日の仕事であった。

谷間の寺

私が入隊や大隊本部に出頭する際は、軍用道路のある仁和集までは一二キロの距離があり、この中間点にある台地と台地の間には谷底に清い小流の谷川が流れていた。この谷間まで金家集の四―五名の護衛兵が送り、谷の向う側から仁和集の護衛兵が迎えにきていた。敵襲を受けたことは一度もなかったが万一の場合に備

えての護衛である。

護衛兵が私のために螺馬を用意して呉れていた。この螺馬乗りの技術が大変である。螺馬は日本の馬と異なり体格が小さい。従ってポカポカでなくコトコトと小刻みな歩調で歩む。これに合わせて騎乗しないと、尻横に移り落馬する。乗鞍もないので座布団を代用した笠もない代物である。降りて歩いた方が余程楽かも知れないが、折角、螺馬を用意して頂いた好意を無にすることも出来ない。

この谷間に小さな寺があった。「浄土寺」と山門に掲げられている。私の生家が浄土真宗であるので合掌して通過する。中国の田舎で寺の在るのは珍しい。この国にも仏教が存在するかと不思議に感ずる。死者は仏教で葬儀が行われ、孔子廟が多いのは生前の思想言動を律するのは儒教であるのかと判断する。朝鮮の田舎ではキリスト教会の多いのに比し中国では教会は見当らなかつた。

この谷の台上で両分遣隊の護衛交代が行われ、暫時休憩を取る。兵達の間で相互の近況を語り合い、和や

かな一時である。この小休止の時間にたまたま通り合わせた中年の夫婦者の旅芸人に出会う。妻は盲で、夫は梅毒で鼻梁が失われて、顔面の中央に大きな穴がボカリ開いている。妻が胡弓を弾いて、夫が唄う。鼻がないので息が洩れ、独特な発音で響く。この哀れな二人、胡弓の哀調に郷愁に似たものを感じ兵とともに耳を傾ける。

便子墟の戦闘

この朝、部落に近づくと敵の急射撃を受ける。路上斥候の久川兵長が堆土に伏せている。頭に鉄帽代用か、途中で徴発したらしい新しい洗面器を二―三枚重ねて冠っている。中国のこの地方では未明路上の馬糞を拾い集める慣習がある。路上斥候の連中も彼等の扮装で便衣に銃の先へ平たい竹籠を垂れ下げて先行していた。

私は隊をこの路上斥候の右に前進して散会、攻撃前進を命ずる。敵は街から逐次右へ右へと移動しながら射撃を加えて来る。これに対し軽機を以て射撃を加えながら前進を続ける。

距離三〇〇メートル、擲弾筒二筒に対し目標を示し射撃を命ずる。本職の筒手連中である。私の先日のような下手はせず、距離方向共に申し分ない命中弾を浴びせる。

筒の弾が街路上とか硬い物に当たるとガイーンと炸裂する。反面軟らかい物に当たるとポォーンと柔らかい音で、弾着個所の判定が出来る。敵はこの筒を小砲と呼んで怖れ嫌っていた。弾着よし、やや遠いが突撃に入る。

街の中央に突入した時、既に敵は街の後方の凹地に遁げつつある。私は直ちに隊を纏め攻撃開始の地点まで引き返す。小部隊の出撃は長居無用が鉄則である。

戦果は多数の遺棄死体に対し小銃が一丁のみ。如何に敵が補給が難しいので兵器を大切にするか私達の想像以上のような。

この時、思わぬ方向から不意に友軍が出現する。中隊本部の若會根少尉の率いる小隊である。少尉も「便子墟に敵侵入」の情報に接し早朝ここまで急進中、筒の爆発音を耳にして急進したとのこと。天長県城にあ

る中隊長、先輩少尉の、未熟者の私と分遣隊に対するいたわりに深く感激した一瞬であった。

以上、昭和十六年八月卒業してから以降四カ月の間、見習士官が独立した分遣隊長として一地区の警備と治安を担当し、僅かな兵と共に日夜苦勞を積み重ね、後日一人の将校として育成され育つのであった。

【解 説】

独立混成第十二旅団略記

武漢攻略も終わった昭和十四年四月、我軍は奥地に送り込んだ大兵力を維持するために、上海、南京、杭州を結ぶ後方地区を堅持する必要から蘇州に司令部を置いた上海―南京鉄道沿線警備の独混十二旅団が設置された。

当時、沿線地区の敵状は忠義救国軍の遊撃隊が盛んに出没し、その兵力装備は侮り難いものがあり、旅団は夜を徹して少数の兵力を以て警備に当たった。

昭和十四年の末、旅団は蘇北地区の警備に変わり、「線」の警備から「面」の警備へと移行する。

蘇北地区は我が国の九州全土よりやや広く人口密度

も高く、地形平坦で山や丘陵が全くなく、大小のクリークが縦横に網状に連なり「南船北馬」の南船地帯である。

米麦作農業と共に棉作も盛んで上海北岸の南通には大紡績工場が経営されていた。旅団の当面の敵は「新四軍」と称し、共産軍主力の「大長征」の際、葉挺の指揮下に華中に残った兵力四万の共産軍であった。

旅団は鋭意地区住民の宣撫、治安の維持を図ると共に、旅団単位の塩城、興化作戦、蘇北作戦等数次の作戦行動と共に、各大隊単位の討伐を反覆し、絶えず敵の大部隊の蟠居、蠢動の余地を与えない作戦指導を続けたのであった。

昭和十八年六月、第六十四師団編成下令、各大隊は従来の歩兵四個中隊編成から機関銃中隊、歩兵砲中隊、歩兵五個中隊と兵員一、五〇〇名と倍増し、二個旅団八個大隊の編成となり、師団長に船引中將を迎え、「開」部隊と改編された。

編成直後、広徳作戦（杭州湾西方地区）に参加。この作戦は大東亞戦突入後の中支派遣軍の食糧基地確保

を兼ねた敵正規軍の掃滅作戦であった。

作戦終了後、蘇北地区に復帰することなく作戦地区に駐留し警備治安に当たたる。

昭和十九年五月、湘桂作戦参加準備のため部隊は大移動を起し、北支新郷に到着後南下、京漢線沿線の敵と交戦しつつ六月信陽に到着した。その間、譚庄の戦闘に部隊長重藤大佐戦死等の激戦が反復された。

佳陽―岳州間は鉄道輸送後、六月二十七日、湘桂作戦参加のため行軍開始。衡陽に進出、付近の余家令で陣地構築中終戦を迎える。

昭和二十一年七月六日、浦賀に復員上陸、部隊解散となる。